

## 研究計画概要書

研究課題名	東海地域における緩和ケア病棟の看護師が抱える緩和ケアに対する困難感
研究責任者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座 教授 安藤 詳子
研究分担者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻 3年 山田 直美
共同研究者 (所属・職名・氏名)	該当なし
研究事務局 (機関の名称・住所・連絡先)	名古屋大学大学院医学系研究科 看護学専攻 安藤研究室 住所：名古屋市東区大幸南1丁目1番20号 連絡先：052-719-1553
研究の意義・目的	<p>&lt;意義&gt;</p> <p>がんは日本人の死因第1位であり、日本人の2人に1人ががんになる時代となった。今後、増加していくがん患者を地域で支えていく中で、終末期看護の実践力を蓄積している緩和ケア病棟の果たす役割が重要になると考えられる。しかし、実際には、緩和ケア病棟開設初年度の看護師を対象とした報告によると、看護師が困難感を体験した際に、【理想の終末期看護ができない】という感想を述べたという指摘がある。看護師がケアに対して困難を抱えていると、患者・家族に対する緩和ケアの実施に滞りが生じて、ケア自体の質やがん患者の生活の質に影響があると考えられる。緩和ケア病棟の看護師は、がん患者やその家族に対して、よりよいケアを実施し、緩和ケアの質を保証する必要があると考える。そのため、緩和ケア病棟の看護師がどのような困難感をもっているのかを追跡的に明らかにすることで、がん患者・家族に対するケアの質の向上に関して考察したいと思う。</p> <p>&lt;目的&gt;</p> <p>緩和ケア病棟の看護師が抱える困難について調査結果を分析し、がん患者・家族に対するケアの質の向上に関して考察することを目的とする。</p>
分析の対象	東海地域にある18緩和ケア病棟に所属する看護師296名中、2016年6～7月、質問紙調査に回答した250名(84.5%)のうち、有効回答239(80.7%)を分析の対象とする。
実施計画	<p>本学大学院博士前期課程在学中の新藤さえ氏が平成28年に実施した「緩和ケア病棟における家族の予期悲嘆に対する支援に関する調査」(倫理審査承認番号：15-145)の結果の一部を用いて分析する。</p> <p>【使用するデータ】</p> <p>●対象者の属性(性別、年齢、経験年数など)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>●緩和ケアに関する医療者の困難感尺度</li> <li>●緩和ケアに関する医療者の実践尺度</li> <li>●医療者のターミナルケア態度尺度日本語版短縮版</li> </ul> <p>【分析方法】</p> <p>対象者の属性、緩和ケアに関する医療者の困難感尺度、緩和ケアに関する医療者の実践尺度、医療者のターミナルケア態度尺度日本語版短縮版に関して、<math>\chi^2</math>検定、t検定、重回帰分析などを用いて、困難感の関連要因を分析する。</p>
研究期間	実施承認日から平成 30 年 3 月 31 日まで
被験者などに対するインフォームド・コンセント	本学大学院博士前期課程の新藤氏の調査した既存のデータを使用することにより、直接、対象者にインフォームド・コンセントを行うことは不可能であるために、調査データを利用する旨の研究計画概要書を「生命倫理審査委員会 保健学臨床・疫学研究審査委員会」の HP に掲載する。
個人情報の保護の方法	使用するデータは、本学大学院博士課程前期課程の新藤さえ氏の研究にて収集された既存のデータであり、既に匿名化されていることから、個人が特定されることはなく、個人情報に関する危険や不利益を生じない。情報は厳重に管理し、研究目的以外には使用しない。卒論発表会などの研究成果の公開時には、病院名などの公開は行わない。